

# デジタル時代の 映像関連用語解説

## No.149 - CP + 2016 -

松野 美茂

今年もカメラの祭典「CP +」に行ってきました。開催場所は相変わらずの横浜パシフィコで久しぶりの横浜小旅行となる。

今年の開催日程は2月の25日(木)から28日(日)まで4日間である。例年通り、木曜日の午前中はプレス専用で一般公開は午後からであった。

今年は珍しく、初日ではなく2日目の金曜日に行き見たのであるが久しぶりに大混雑の感覚であった。

2日目と言う事も有るのであろうが何か今年は活気が違っている様で有る、人の数とその感覚を強く感じさせていた。

入口からごった返した人ごみを抜けると例年の様に左側がOlympus、右側がSONYのブースである。

この2大メーカーが入り口脇を占めているのであるから入り口付近の混雑は仕方がないのではあるが、この込み具合は例年以上であった。

OlympusはPENの新型機を出していたが比較的落ち着いた展示で従来製品のラインナップを丁寧に展示しており、操作可能なデモ機も手に取りやすい上程で展示していた。

ブースの中に入るとそれ程の混雑感は感

じなかったのが快適に見て歩く事が出来た。逆にSONYは動体を撮影する為の展示部分があり、ここにSONYの展示機が設置されているのであるが、何故だか多くのお客さんは自分の持ち込んだカメラでの撮影にもチャレンジしており、おそらく想定以上の混雑をブース周辺で発生していたと思われる。やはりSONYも落ち着いた展示を行っており目玉商品だけを猛プッシュするという様な過去に有った展示携帯は取っていなかった。奥の方に4Kでのモニター展示がなされていたが大きく打ち出すと言うよりは日常として4Kを展示し、お客さんにも4Kが日常である事を感じさせる展示になっていたと思う。

SONYの展示を見た後にPanasonicの展示を見て気が付いたのであるが家電メーカーとしての側面を持つカメラメーカーが家電の連携や写真を撮る以外の利便性に殆ど言及していないか、その要素を大きく打ち出していない風潮がある事に驚いた。

おそらくその為に落ち着いた展示と感じた部分も有ったのではないだろうか。

Panasonicは新型の望遠レンズを一番の目玉として展示していたが、見た目からの猛プッシュ感はやはりなかったのである。

SONY、Panasonic共に新型レンズなどの展示やコンパクトカメラのバージョンアップなどはあるが、大きなカメラシステム上の変更などは感じ有れず純粋なカメラメーカーの落ち着いたラインナップを見せている風格が有った。

見方によっては低調な感じを受けてしまうが、やはりカメラはデジタル化して家電的になったとはいえ従来のカメラと同じような寿命の感覚が無いとユーザーに安心感を与えられないのではないだろうか。その様な点に関してはOlympusのスタンスが非常にバランスが取れていると言えるのではないだろうか。

そんな中ではシステムを大胆に変更して注目を浴びていたメーカーが有った。

そのメーカーはSIGMAである。CP + 2016開幕直前に発表された「SIGMA sd QuattQuattro」はSIGMA機の特徴であるフォビオンX3センサーを搭載しながらコンパクトミラーレス一眼のスタイルを取ったのである。

これまでSIGMAはフォビオンX3センサーを搭載したコンパクト機は生産していたがレンズは固定のモデルを数種類画角に合わせて用意していた形になっていた。

### 用語解説

#### 「AutoDesk Stingray」(スティングレイ)

オートデスク社が発表したゲームエンジン、先行する3つのゲーム会社によるエンジンに対してソフトウェアメーカーが発表した新ゲームエンジン。

そもそもは他社のゲームエンジンを買収して創り上げられたものであるが、オートデスクの3DCGツールであるMayaなどとの親和性を高めた構造で3DCGユーザーから見ると使い慣れたツールが使用できる敷居の低いエンジンである。

MayaLTにはバンドルされていた様であるが、現在では月5,000円のサブスクリプションとなっている。この金額にはMayaLTとStingrayの両方が付いている。

多くのCGクリエイターにとっては導入しやすいゲームエンジンであるが先行するエンジンとの競合に関してはこれからであると言えよう。今後の展開が楽しみである。

そこにコンパクトながらレンズ交換型のコンパクト機を登場させた訳である。レンズマウントはシグマ SA マウントで一眼レフ用のマウントである。センサーサイズは APS-C タイプと APS-H タイプの 2 モデルを用意する念の入れようである。

そもそもフォビオンセンサーは他社の一眼レフ機のセンサーとは一線を画している。

RGB の画素を平面上に横に並べたベイヤー構造ではなく、フィルムと同様な積層された RGB センサーを持っているので解像感と発色が他社とは全く違うのである、構造が違うのであるから当然ではあるが。

特にデベイヤー処理による偽色は原理的に発生しないので一部では熱狂的なファンも存在する様である。

今回の様にレンズ交換型でコンパクトタイプで有ればフォビオンセンサーに興味があっても踏み切れなかった層にセカンド機としての需要が見込まれるのではないだろうか。

そういう意味ではデジタルカメラ業界に新しい風を吹かせるかも知れないのである。

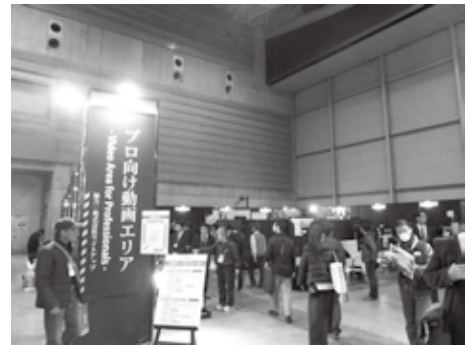
Olympus と SONY の間の通路をそのまま進んだ対面には Panasonic と CANON が通路を挟んでいる。Panasonic は前述した様にやや寂しい落ち着いた展示であったが CANON は SONY に近い展示をしていた。

動体の撮影用には人物が器械体操などが出来るステージを設けて実際の動く人物を撮影できる環境を提供していた、SONY と比べるとやはり豪華なイメージである。また特徴的だったのは写真を撮影した後のプリントアウトまで一貫したシステムを CANON は提供していた。

これはプリンターメーカーでもある自社の強みを生かした構成である。つまり全体的な色管理が出来ると言う事でよりプロフェッショナルな環境を個人ユーザーにまで提供して行こうと言うアプローチである。

今後のデジタルカメラ業界の安定した成長を考えると非常に大事な一面を担っていると考えられるので CANON の業界王者としてのプライドも垣間見える様な気がしたのである。

全体を通しては成熟の方向にデジタルカ



メラ業界は進み始めた様に思われる。アナログ一眼レフ時代から SONY、Panasonic 参入などの激動のデジタル化時代を経てカメラ業界は注目を浴び大きくマーケットは復活した。その中で生まれたミラーレス一眼がブームを起こしカメラ女子などニューカマーもやって来て大きく市場は変化していった。

その間の成長速度は目覚ましく、性能や利便性はアナログカメラを凌駕し始め多くのプロ用の動画機材にも大きな変化をもたらして行った。

そういう意味ではイノベーションによる大変革が起きたのである。奇しくもプロ用動画カメラつまり放送機器用カメラをはほぼ独占的に生産していた SONY や Panasonic が、その市場を奪われながらもデジタルカメラ業界に参入し成功した事は偶然とは言えないだろう。

その様な激動の変化もどうやら一段落の兆しが見えて来たのかも知れないと今回の CP + は教えてくれたような気がする。

その証拠に毎回 CP + の一部で開催展示されていた「プロ向け動画エリア」は以前の迫力を失っていた。展示されている機材は既にデジタルカメラでも可能な領域になり目立った展示はプロ用のリグなど運用上のノウハウを形にしたものが多かった。

この事からも動画？と静止画？の境目は無くなりある意味での統一場が現在はおもたられていると言っても良いのだろう。

この後は 8K 対

応が両業界の力関係を変えるかも知れないが、ともかくテクノロジーの発展が放送業界とカメラ業界を一つに纏めてしまう時代が到来しているのである。

また、これらの動画、静止画の競合とは違った側面からは VR カメラと VR 映像の時代もひたひたと近寄っている事を CP + は感じさせてくれた。

大手各社は 360° 撮影の機能を相次いで発表しており、最も先行し成功している RICOH の THETA を筆頭に大手とベンチャーは円周魚眼や空間全部を撮影できる VR カメラを展示していた。この世界は立ち上がったばかりであり玉石混交の状態ではあるが従来型のカメラの運用環境とは全く違うのでチャレンジできる新たなマーケットとなっている様である。

レンズ技術を持つ日本メーカーは後れを取らず積極的にこの世界に挑戦して頂きたいものである、今後の VR 業界との相互発展には VR カメラが重要な位置を占める様に成る筈なので怠らずチャレンジして頂きたいものである。

Yoshishige Matsuno  
VFX スーパーバイザー

## 映像スタジオ施工

多様化するデジタル映像環境に対応、映像スタジオ施工なら豊富な実績、直営システムに依る徹底したコストダウンを実現する



匠の技をスタジオに

## MA室 ブース 各種 編集室

新設、リニューアルに関わらず何でもご相談ください。

～映像・音響専門で  
**38年**～

(映像・音響・防音・建築・設計・施工)

一級建築士事務所

## 高橋建設株式会社

本社 〒216-0032 神奈川県川崎市宮前区神木1-7-8

TEL044-853-0547 044-852-1588

(社)日本ボストプロダクション協会会員 / (社)日本音楽スタジオ協会会員  
(社)日本音響学会会員

http://www.takahashi-kensetsu.co.jp  
info@takahashi-kensetsu.co.jp